

科学コミュニケーションの課題を解決する！

島根大学提供
作成日 2016年2月10日
更新日



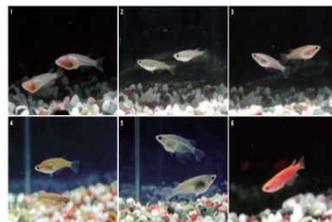
研究者氏名 いわせ みねよ 岩瀬 峰代	所属機関 島根大学 教育・学生支援 機構 教育開発センター	関連キーワード(複数可) サイエンスコミュニケーション、アート、対話、進化、めだか
主な研究テーマ ・研究と教育をつなぐことに関する研究		主な採択課題 ・挑戦的萌芽研究 平成24～26年度(配分総額:3,770千円) 課題名「研究文化を表象する学術展示制作手法の開発と評価」

① 科研費による研究成果

科学コミュニケーションの課題の一つに、科学への市民の関心の低さがある。そのため、科学に関心の低い「低関与層」にアートを用いて科学を伝える試みがなされている。しかしながら、それがどのような印象や理解を喚起しているのかといったことは十分に考察されていない。本研究では、研究者とアーティストの対話から生み出された科学的内容をモチーフとしアート作品(A)と従来科学コミュニケーションで用いられた視覚資料(B)を比較し、印象と伝達効果における違いの有無とその傾向について調査した。



A: 科学的内容をモチーフとしたアート作品



B: これまでの科学コミュニケーションで用いられた視覚資料

その結果、「アート作品」は「視覚資料」よりも①新奇な印象をもたらすこと、さらに市民に親しみやすいベースを用いたアナロジーで表現された場合②従来のグラフ表現よりも伝達効果を高める可能性があることが示唆された。このことは、アート作品は広報用に撮られた標本写真や市民向けにアレンジされた研究内容のイラストレーションとは異なる印象、伝達効果をもたらすことを示す。したがって、アート作品の持つ特性は、科学に関心の低い「低関与層」にどのように働きかけるかといった科学コミュニケーションの課題を解決する可能性があることが明らかになった。

なお、この研究は奥本素子(京都大学)との協働により行われた。

② 当初予想していなかった意外な展開

逗子文化プラザホール展示2012、日本分子生物学会第36回年会(2013)アート企画「サイエンスとアートの接点」、神戸土湯アラブドアートアニュアル2013、真鶴まちな一れ(芸術祭)2014等で展示を行った。その際、作品を前にしたギャリートークは活発な会話が交わされ、アート作品が会話を誘発したものと考えられた。

なお、芸術家は「研究者の強い興味関心に、自分自身も刺激された」、研究者からは「自分の研究が異なる形で表現されたことに面白さを感じた」、一般市民は「見ているだけでも面白いが、研究の内容が伝わってきた」といった感想を得ることができた。



真鶴まちな一れ:ギャリートークの様子

③ 今後期待される波及効果、社会への還元など

本研究は科学的内容をモチーフとしたアート作品が人々に目新しさを認識させる傾向があること、アートによる大胆な翻訳表現であっても、市民に理解しやすい表現であれば科学の伝達効果が期待できることを明らかにした。このことは、このようなアート作品が科学への関心の低い層を含めて一般市民が科学の成果を的確に理解し、科学の課題について多くの人と議論を行う「場」を生み出す可能性を示唆する。